



# 太陽の子

さいたま市立常盤小学校だより  
令和4年8・9月号(第6号)  
令和4年8月26日発行

## 【学校教育目標】

心身ともに健康で 思いやりの心をもち 主体的に学ぶ常盤っ子の育成

喜んで登校 満足して下校

## 【めざす児童像】

- よく考える子
- 思いやりのある子
- たくましい子
- かかわりあいを大切にする子

## リアルな体験

校長 三島 公夫

今年も with コロナ、with 熱中症の夏でした。とは言え、行動制限のない夏でもあり、久しぶりの夏を楽しまれたご家庭もあるでしょうか。一方、今年も水害がありました。被害に遭われた方々にお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復旧を願わずにはいられません。

さて、私の今年の夏を三つ紹介します。三つに共通するテーマは「リアルな体験」です。

一つ目は、大相撲夏巡業「さいたまスーパーアリーナ場所」を観戦したことです。大栄翔関や北勝富士関ら埼玉県出身の力士たちがスーパーアリーナへ凱旋しました。北勝富士関は、若隆景関とともに子どもたちの質問コーナーにも出演し、会場で観戦していた常盤小の児童の「どうしてお相撲さんになったのですか?」の問いに、「子どもの頃、わんぱく相撲で負けて悔しかったので本気で相撲をやろうと思いました」と優しい口調で答えてくれました。人生のきっかけについて北勝富士関から直接話を聞いた子どもたちの心には、きっと夢の実現を目指す気持ちが芽生えたことと思います。取組では、立ち合いでぶつかり合う時のゴツン!という音が聞こえます。力士の汗の玉が光って見えます。白熱した取組を間近で観戦すると迫力を感じます。この日の最後の取組は、横綱 照ノ富士とさいたま市内の高校出身の大関 貴景勝。会場の盛り上がりはいやが上にも最高潮に達しました。

二つ目は、8月23日の青少年育成常盤地区会主催の花火大会です。オープニングでは本校と常盤北小の金管バンドによる演奏。屋外での演奏ながら、子どもたちの息の合った演奏は実に見事でした。特に、教諭の指揮による両校合同演奏「アンダー・ザ・シー」は、たった1時間前に合わせて練習をただけとは思えないほどの仕上がりでした。花火師による本格的な打ち上げ花火に、夜空はまるで菊や牡丹が色鮮やかに咲いているかのよう。生演奏と花火の音を耳で聴き、鳴り響く音の振動を身体全体で感じる。そして、手を伸ばせば届きそうなほどの近さで一瞬だけ輝く光の模様に自分の夢物語を重ねる。本校児童のお母さまが「やっぱり本物はいいですね」と、感極まって涙しながらおっしゃっていた姿が印象的でした。

8月中、いじめ防止に関する「子ども会議」とシンポジウムがありました。オンライン参加もある中、関係者が参集して対面で開催するのは3年ぶりです。顔を突き合わせて議論すると、相手の顔の表情が分かります。声の微妙なトーンの違いを伺うことができます。会場の人たちが頷く姿も目に入ります。だから、という訳ではないかもしれませんが、相手の顔を直接見て、相手の声を直接受け止めるから、深い、熱い議論を交わせるのだと思います。

よく「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、行ったことは理解する」と言われます。これは、実際にやってみたり、直接体験したりすることで、物事やその本質が分かるものだということを指摘する言葉です。コロナ禍により、思いがけず一人一台端末の整備とデジタルDXが急速に進んでいます。多くのことがデジタル化されることで、私たちの生活は確かに便利になりました。学校での学びも大きく変わりつつあります。しかし、大相撲の真の迫力は、土俵際で力士の激しい息遣いを感じながら観戦することで感じるすることができます。花火大会でのお母さまの涙は、子どもたちの生の演奏を聴いて、目の前で打ち上がる花火を観て、美しさを自分の身体で感じられたからの涙なのだと思います。どうやら人間の諸感覚に直接訴える刺激こそが感動を呼び、心に火を灯すのだと考えて間違いなさそうです。

今学期もデジタルの優位性はしっかりと認識しながらも、「リアルな学び」を目指した教育活動を進めてまいります。2学期もどうぞよろしくお願いいたします。